



仕事から、地方に出張して、夜、ひとりで食事をするのが少なくありません。そんな時は、ひとりで飲める小料理屋を探します。

私の「独り飲みの掟」は、

- 1) ●民などの全国チェーンの店には入らない
 - 2) 古くからありそうな店で、かつ、カウンターがある店を選ぶ
 - 3) 混んでいない店を選ぶ、
- の3つです。

せっかく知らない土地に来たのだから、どこにでもあるような大手チェーンの居酒屋に入るのは味気ない、そう思って駅前を探索するのですが、全国どこに行っても、主要な駅の近くでは、●民などの大手チェーン店が幅を効かせています。「これだけ全国各地の左党から、毎晩、お金が入ってくるんだから、●民の社長は儲かるわけだな・・・」と妙に感心したりしながら街をさまよいます。

路地裏に入り込んだり、駅から離れてみたり、時には怪しげな店の前に立つ客引きのお兄さんに尋ねたりして、自自分好みの店を探し出します。でも、すぐには店に入りません。というか、入れません。恐る恐る戸口のガラス越しに店の中の様子をうかがい、カウンターの客入り具合や女将や板さんの様子を確認します。常連さんと女将が

やけに親密に話しこんでいたり、先客が大勢で騒いでいるようなら、遠慮してまた別の店を探します。

あまり込んでなくて、ヨソ者一人が座る余地がありそうだと感じたら、勇気を出して戸口を開けて一步店に踏み込みます。

「いっらっしゃいませ」という女将の声とともに、先客がこちらにジロリと視線を投げてきます。「ひとりなんですけど・・・いいですか?」と問う私。「ハイどうぞ～」と女将。ヨソ者が人畜無害そうだと確認すると、先客も姿勢を戻して再び杯を傾けます。

「何にしましょう?」「とりあえず生ビール、あと、何か魚ありますか?」最初はお互いに間合いをはかりながらのぎこちないやりとり。

しばらくして女将のほうから、「今日は暑かったですね」とか「お仕事ですか?東京から?」とか、きっかけづくりの問かけをもらえると、そこから会話が弾みます。場が和んでくると、最初にジロリと視線を投げてきた先客も加わって話が盛り上がったりします。

料理と会話に満足した翌日、仕事先で地元の人に、「ゆうべは●●という店で飲みました」と何気なく話すと、「えっ!あの店に行ったんですか・・・勇気ありますね。」と驚かれたりすることもあります。そんな時には、どんな日く付きの店なのかは、あえて聞かないようにしています。

夏の思い出・・・本間繁敏



今年の夏もいつもの年と同じく、山形の実家に帰省し骨休めをすることができました。上京以来、早25年が経ちますが、この間盆休みに帰省できなかったのは、仕事の都合による1回だけですので、ほぼ皆勤賞といっていいほど我が家の年中行事になっています。

学生時代の夏休みは1ヶ月ほどあるのが普通ですが、高校時代は水泳部に所属していたため、夏休み中であっても毎日部活に明け暮れる毎日でした。学校の屋外プールで少ないときでも1万メートルくらいは泳いでいましたので、目の周りは白いまま(ゴーグルのせい)で体は真っ黒に日焼けし、それは健康的な若者の象徴であったことに間違いはありません。そのお陰か、当時千葉県で開催されたインターハイにもバタフライで出場し、予選落ちではありましたが、いい経験をさせてもらいました。

そのときの顧問の先生からは、「身体能力だけでなく、精神的に強くならなければいい記録は出せない。”Be positive thinking”が大事」ということを教えていただきました。

これは今では当たり前のように、どんなスポーツにおいても使われているようですが、簡単に言うと「朝、起きたときから試合が終わり、自分が表彰台に立ち、声援に応えていることを想像する。」といった単純なことなのです。自分で自分にいい意味で暗示をかけることにより「毎日一生懸命に練習してきたのだから、必ずいい結果がでる。」と、積極的(positive)な考え方をすることで最大限の能力を発揮することができるとの考え方です。

高校時代に教えていただいた”Be positive thinking”は、社会人になってからも役立つことが多くの場面であり、顧問の先生には大変感謝をしております。